

染 香

ぜんこう

福 泉 寺 寺 報
令和8年4月
第 142 号
毎月 1 日発行

ホームページ



おて LINE



Facebook



「問い」のかたち

最近、スマートフォンの向こう側にいる「Ａ」と対話することが増えました。ChatGPT や Gemini といった生成Ａは、今や私の住職としての務めに欠かせない「相談役」となっています。法要行事の企画から日々の健康管理まで、彼らは実に見事な回答を提示してくれます。

しかし、使い始めてすぐに気づいたことがあります。こちらが曖昧な聞き方をすれば、Ａもまた、当たりさわりのない退屈な答えしか返してくれないということです。時には「もっと厳しく評価してほしい」と条件を付ければ、気遣いばかりが先行する回答に終始してしまいます。Ａから「真に価値ある言葉」を引き出せるかどうかは、こちらの「問いのかたち」にかかっているのです。

この仕組みに触れたとき、私の脳裏をよぎったのは、古来より伝わる「お経」の風景でした。「これは仏教だー」と…。

お経の多くは、お釈迦さまとお弟子さんたちのダイナミックな「問答」の記録なのです。そこには、切実な問いをぶつける弟子に対し、お釈迦さまが鮮やかな智慧をもって導かれる姿が描かれています。そして、時にはお弟子さんの問いが非常に本質を突いたものであった

とき、お釈迦さまは「善い哉、善い哉（素晴らしい問いだ）」と最大級の賛辞を送られました。これが、私たちが口にする「ぜんざい」の語源となったエピソードです。

時代は令和になり、対話の相手がお釈迦さまからＡへと変わっても、真理は変わりません。【正しい答えは、正しい問いから生まれる】という一点です。

翻って、私たちは人生という大きな舞台で、どのような問いを抱えて生きているでしょうか。「どうして私だけがこんな目に」という嘆きは、時に私たちを思考停止に追い込みます。しかし、もしＡにプロンプト（指示文）を入力するように、自分の人生に対して「この苦しみをどう活かすべきか」「この状況下でできる最善の行いとは何か」と問いを変えてみたら、仏さまやＡから返ってくる答えも、また違ったものになるはずです。

思い通りにならない「しょうがないこと」ばかりの世の中だからこそ、安易な答えを求めのではなく、自分の中の「問い」を磨き直す。Ａという最新の鏡に照らされて、私は今、仏教が説き続けてきた「対話」の深遠さを改めて噛みしめています。



（住職）

真宗用語の基礎知識



【問法】

「仏法を聞くこと」を指しますが、単なる知識の習得ではありません。仏さまの教えを、自分自身への「問いかけ」として聞くことでもあります。

最近、ＡＩとの対話手法の一つに「壁打ち」というものがあります。こちらが一方的に指示を出すだけでなく、逆にＡＩからも質問を投げ返してもらうことで、自分の考えを深めていく作業です。浄土真宗における「問法」も、まさにこれに似ています。それは、阿弥陀さまから「あなたはどう生きていますか？」という本質的な問いをいただく時間でもあるからです。

ＡＩへのプロンプト（指示）を磨くように、仏さまの言葉を「鏡」として、自分自身の心のありようを照らしてみましょう。親鸞聖人は「聞」という字に「信じる（疑いなく受け入れる）」という意味を込めて、深く重んじられました。問いを立て、その答えを聞き届ける。その積み重ねの先に、揺るぎない安心（あんじん）があるのです。

ち ょ っ と あ た ま の
こ り ほ ぐ し

100－1＝何色？

こたえは裏面です



おてらより

★6／4（木）5（金）

第56回鴨川組念仏奉仕団

●歴史ある行事ですが、いつも新しい出会いがあり、毎年「いつてよかった」と味わえて、ありがたいです。

●今回は、2日目に大原三千院にもお参りいたします。

詳細は別紙、締め切りは4月末、お申し込みはお寺までお願いいたします。

★6月開催

第3回ちいさな音楽会

今年も開催します。実はお寺の本堂は成功に設計された「音楽装置」なのです！広島からお越しの酒井さんと、やさしい時間を一緒に過ごしましょう。

インスタでも発信します♡



★新しい総代さま

●豊田光雄さま（上山守）

平井克浩さま（江良）

お二人とも「アフレコ」で現役です。改めてよろしく願い申し上げます。

「してあげる世界」と「させていただく世

東井 義雄

「みずから」という字も「おのずから」という字も、どちらも「自」ですが、意味は、真反対ほどちがいます。真反対ほどにちがう中身が、おなじ「自」という一字にまとまるとはまた面白いことです。人生は、「みずからの世界」から「おの

ずからの世界」に還らせていただく旅だ、ということかも知れません。親鸞聖人が「回向」という文字に「セシメタマフ」と送りがなをつけていらっしゃるのも、「回向ス」という「みずからの世界」から「おのずからの世界」への回帰をお教え下さっているのではないかと、味わわせていただくこの頃です。さて、家庭も「みずから努めさせていただく人生道場」と考えると、何だか逃げだしたくなるような思いもします。が、「おのずからなるお念仏の道場」となると、味が全くかわってくるのではないでしょうか。私が、ずっと以前から「お念仏の師」としてひそかに敬仰させていただいてきた先生に雑賀正晃先生があります。その雑賀正晃先生のご著書の中に、まことにありがたいお話がでてまいります。先生が、どこかのお寺のご法話におでかけになり、夜のご法話を終られて控室にお帰りになりましたのを、一人の奥さんがお訪ねになりました。その奥さんというのが、結婚して二年たたぬ中におじいさんが中風でたおれて全身不随、それからまたおばあさんがたおれて全身不随、それからまた間もなくご主人が（屋根葺さんだそうですが）よその屋根から転落して下半身不随……（そのお家はお父さんは戦死、お母さんは再婚ということで四人暮らし）ということとで、結婚して五年もたたないのに三人のシモの世話までしなければならなくなられたのです。農家でですから田の仕事もあります。村の人が気の毒がつて「あんたはこの家に病人の世話をしに来たようなものだ。さいわいまだ子どもさんがないんだから実家へ帰らせてもらいなさい。せつかくの女の一生を棒にふってしまふ」といわれると、そうさせてもらいたい気もするのですが、だからといって三人の病人を見捨てて帰ることもできかね、毎日毎日心が迷って定まりません。「わたしはいったいどうしたらいいのでしょうか」という相談のためだったのです。「迷っていないで、心を定めて生

きようとされることは尊いと思いますが、私の意見を聞きに来られたのなら、すみませんが帰ってください。私はあなたの人生を指図できるような人間ではありません。しかし、如来さまの教えを聞きに来られたのなら、それをお伝えするのが私の役目ですから、喜んでお答えしましょう。ただし、如来さまのみ教えは絶対なのですから、仰せの通りに従うことができますか、単に参考にするというようなことでは法を聞く者の態度ではありませんから、やはりお帰り下さい」と言い切っておられるのです。それに対して、「先生のおっしゃることが、そのまま仏さまのみ教えなのですから、仰せのままに従わせていただきます。どうかお教えください」では、お答えしましょう。どちらにでもなさい。でも、こう答えたなら、さぞかしご不満でしょう。どちらか一つの道がききたくて訪ねて下さった奥さんにこんなことを申し上げては、いかにも無責任だとお考え下さるでしょう。しかし、どちらの道でも行けるからこそそう申しあげるのです。ただし、ここではっきりしておかなければならないことがあります。それは、播いた種子は生える、ということです。この世は、あくまで因果の道理で動いているのだということです。この因果の道理だけは、いかな仏さまでもお曲げになることができないのです。はつきりいつて、その三人の皆さんが、それぞれ、そういう病気を病まねばならぬのは、その三人の方々それぞれのの中にそういう“因”があったということです。そして、また、その三人の面倒をみなければならない奥さんにも、そうしなければならぬ“因”が、あなたの中にあったということなのです。むごい言い方のようですが、真実はそうなのです。でも、奥さん、逃げたければお逃げなさい。逃げることもできるのです。だから、どちらにでもなさい、といったんです。但し、逃げて事は済みませんよ。逃げて事がすむと思ったら大まちがい。逃げるということは果をはたさずに行くことですから因が残っている。因が残っている以上、きつと逃げた先に果が現われてくるのです。それと、もうひとつ、逃げたということが因になって、逃げた先に果が現われてくるということです。だから、今の立場でひとつの果をつんでいくか、それとも逃げた先でふたつの果をつむか、それだけのことです。それを承知

の上でどの道を選ばれようと、あなたのご自由です」「先生、おはずかしいことでした。己れの播いた種が己れに生える。そうでした。これだけお聞かせいただいきながら、さてわが身に火の粉がふりかかってくると、その大事なことをすっかり忘れてしまつて、何で私だけがこんなつらい目にあわなければならぬかと思つたりしまして……。先生、受けていきます。どこまでも、私の業を果たさせていただきます」「奥さん、ありがとう。よういうて下さった。私のような者でも、こんなに涙がこぼれるのに、如来さまや親鸞さまがどんなによろこんで下さるでしょう。さあ、夜もずいぶん更けたからお帰りなさい。ただ、最後にもう一つ申しておきたいことがあります。重い重い業を背負つて、泣きながら帰っていかれる奥さんですが、あなたがひとりで泣いてい

るのではないのだということです。その苦しみを代つてやるものなら代つてやりたい。しかし、業報の世界はひとりひとりの世界なのです。代つてやれるのなら、如来さまには苦もなければ大悲もないのです。代つてやることができないから泣かずにおれない。それが如来さまの大悲なのです、あなたがひとりで泣いているのではない、いっしょに泣いていてくださる方があるのです。どんなにかつらいでしょう。悲しいでしょう。でも、この大悲とともにがんばろうね」ということで別れたのです。先生のお教えによつて、この奥さんは、「してあげるのではなくて、させていただくのだ」ということを了解されたのです。他人の荷物を背負つてあげるのではなく、己れの荷物を己れが背負わせていただくのだと受けとめられたのです。それから、数年たつて、雑賀先生がそこへお出ましになったとき、またその奥さんが訪ねてこられました。「あれから、三年程たつて主人が亡くなりました。ある日のことでした。その日はいつになく元気で、『おまえ、いっぺん、抱きおこしてくれないか』と申します。妙なことをいうなど思いながら、そつて上体をもたげて、柱を背にしてあげたら、『おまえ、前へまわつてくれんか』と申します。前へまわりましたら、主人が両手をあわせて、『ようも、ようも、長い間、俺たちの面倒をみてくれたな、ありがとう。このご恩だけは忘れんよ』と、拜んでくれるのです。先生、あのときおっしゃつてくださったおかげで、逃げ